

研究ノート

資本論における方法と世界観（中、その四）

——その残された諸問題の一つについて——

梯 明 秀

内 容

まえがき

一、方法ということ

二、世界観ということ

三、近代経験科学の体系化

四、近代科学としての経済学における体系化

五、賃労働者の実存形態——（以上第十八卷第一号）

六、マルクス主義の成立——（第十八卷第四号）

七、会見以前のマルクスとエンゲルス（第十八卷第五

六号）

八、徹底したヒューマニズムの精神（第十九卷第一号）

九、マルクス主義の発展（本号）

九 マルクス主義の発展

四四年の八月におけるマルクスとエンゲルスとの記念すべき会見を、実現せしめたのは、それぞれ独自の研究経歴の所産としての理論的成果を、これら兩人が相互に照し合わせて、そこに、一致すべきはずの同一の立場に到達したことを、相互に確認しあった、ということに拠るのだと、ただいま

（本稿の前節の末尾のところまで）申してまいりました。そして、

そのばあい、この同一の立場ということは、もちろん、二人のあいだに理論的内容の一致を見いだした、ということの意味するわけですが、さらに、この理論的一致のための根底には、兩人とも「徹底したヒューマニズム」の精神を共有していたという事柄が、横たわっていた、ということについてとくに皆さんの注意を促しておきました。また、さきほど

(「本稿の第六節の末尾のところでも) 申しておいたことですが、四四年までに、マルクスとエンゲルスの兩人が、それぞれ独自に成立せしめていたところのマルクス主義なる理論は、同年の記念すべき会見以後の、兩人の協力関係が、より緊密になつてゆくなかで、ますます具体化されてゆき、一步一步と完全なものに接近してゆく、といった経過が、マルクス主義の発展の過程である、というように解釈することができるはずであります。いいかえますと、マルクスとしては、パリ時代において、ヘーゲル弁証法の完全な唯物論化を成しとげたうえで、ブリュッセル時代、および、その前後において、エンゲルスと協力しあつて、古典経済学の科学性を批判的に継承するという努力を積み重ねてゆくという研究過程は、また同時に、空想的な社会主義の諸理論を克服したところの、新

資本論における方法と世界観(中、その四)(梯)

らたな科学的社会主義の理論の確立へ到達する過程でもあつた、というように解釈すべきであると、言うことができるのであります。このことについては、具体的に兩人の年譜をたどつて、それらの業績内容を、受け売りの知識のままであつても、とにかく点検してゆかねばならないと存じます。とりあえず、パリ時代のことについては、ただいま(「本稿の前節をつうじて)やつてまいつたところでありませう。そして、ブリュッセル時代のことについては、これから、お話ししてゆきたいと存じます。要するに、このようなマルクス主義の発展の初期の段階において、また、そのかぎりでは『資本論』に到達するまでの後期の段階においても同様に、兩人の「徹底したヒューマニズム」の精神が、その思想的モメントとして、その発展の全過程をつうじて生き続けていた、ということについて、ぼくとしては、皆さんの注意を促しておいたわけであつたのでした。

さて、さきに(「本稿の第六節の末尾のところでも、マルクス主義の理論面は、ヘーゲル哲学と古典経済学との同時的なアウフ・ヘーベンにおいて成立する、と申しておきましたが、この理論面なるものは、社会主義的な実践のための理論を

も、同時に創り出し有すことになっている、すなわち、空想的社会主義の理論を科学的社会主義の理論にまでアウフ・ヘーベンしたことになる、ということについても、さきほど（『本稿の第六節の末尾のところ）、お話しをしまいいったところですが、この三源宗の同時的アウフ・ヘーベンということは、マルクス主義の成立期だけでなく、その発展過程においても、当てはまるはずの論理構造であるとも考えてゆかねばなりません。しかも、マルクス主義を發展せしめる研究過程は、いま申しましたように、その成立期におけるところの、経済学と哲学との同時的アウフ・ヘーベンということ、を、いいかえれば、止揚されたところの経済学と哲学との関連ないし結合の仕方を、哲学を経済学のうちに内在化せしめるといふ方向に、すなわち、唯物論化された弁証法を、経済学研究の方法とするという方向に、より一層、徹底せしめてゆくことによって、これらの二つの学問の結合を有機的なものにならしめていく過程でもある、ということができるわけでありませぬ。

ところで、マルクスが経済学に腰を据えて、その研究に専念しはじめる、ということは、一部に誤解されて解釈されて

いるように、彼が、それと同時に、もう哲学することを止めにした、ということでは決してないであります。このことは、さらに、共産主義的实践のための理論としての、マルクスおよびエンゲルスの科学的社会主義の理論においても、同時に当てはまることである、というように理解するべきだと、ぼくは考えるものなんです。一般に、マルクス主義が科学的社会主義であるというばあい、この社会主義の科学的であることだけに注目して、この点を、その空想的であることからの脱却としての一面を強調するのとどまる、という傾向が、学界に支配的になつているのでないか、というように思われますが、しかし、こうした通説にたいして、この講義でぼくとして特に指摘しておきたいと思うことは、マルクス主義の實踐的モメントの理論としての、その科学的社会主義の理論のなかには、アウフ・ヘーベンされた哲学が内在している、ということについてであります。

それでは、この科学的社会主義に内在している哲学的思想とは、何かと申しますと、それは、いうまでもなく、マルクスが『独仏年誌』の二論文で明確に打ち出してきたところの「徹底したヒューマニズム」でなければなりません。社会主

義的な立場の実践において、その実践における目的が成就するために、この目的を必然的な結果とせしめるはずの、その原因についての分析が必要であるわけです。いいかえますと、このような因果的關係を対象的な社会状態のなかに探求するという科学性、すなわち、目的の実現は科学的法則によって裏付けられていなければならないということは、いうまでもなく大切なことであるわけです。が、しかし、このばあいに、それよりも、もう一つ大切なことは、実践の主体、および、この主体の目的とするものが、マルクスのいうところの「普遍的人間への解放」という「徹底したヒューマニズム」なのであって、この内容的な思想を忘却してしまつては、い

かなる社会主義的な実践も、それが科学的であつても、たんに形骸だけのもの、たんに、その都度都度に打ち出だされる政策、そういういみでの戦術だけのものにすぎないものになるほかない、ということなのであります。いいかえますと、このような戦術における目的実現が、たとえ因果的必然性によつて裏つけてあるとしても、そのかぎりでの社会主義的な実践というものは、一つのマキャベリズムにおちいるほかないのではないか、ということについて、ぼくは、皆さんの注

資本論における方法と世界観（中、その四）（梯）

意を喚起しておきたいと思つております。そういういみで、いま申しましたことを、すなわち、社会主義的实践には「徹底したヒューマニズム」が初めから終りまで一貫しておる、というものでなければならぬということ、念のために付け加えたまでのことなのであります。

さて、マルクスとエンゲルスとは、ブリュッセル時代において、その社会主義の理論を、より科学的なものに發展せしめる第一歩を踏みだしているわけですが、この第一歩なるものは、たんに実践のための理論を具体化した、というだけにとどまらないのであって、この実践のための理論を、さらに実践の活動に移して、実際の政治的運動を指導するということを、やっているのであります。この実践の領域にまで生かされた科学的な社会主義とは、いうまでもなく共産主義運動なのであります。しかし、この共産主義運動においても、その思想的内容が「徹底したヒューマニズム」でなければならぬ、ということ、ただいま申しあげたとおりであります。マルクスは、四五年の二月に、フランス内務省の決定によつて国外に追放されることになつて、ベルギーのブリュッセルに移住いたします。そして、その年の十二月には、こん

八五（二〇九）

どは、プロイセン政府がベルギー政府にたいして、マルクスの身柄の引き渡しを要求するように画策中だ、ということを知らされて、マルクスは、プロイセンの国籍を離脱するのであります。ここでマルクスは、ついに「さまよえるユダヤ人」となったわけがありますが、翌四六年に入って、その一月から五月までのあいだに、エンゲルスと協力して「ドイツ・イデオロギー」を執筆するのですが、その執筆の過程で、すなわち、この年の二月に、エンゲルスとともに、ブリュッセル在住のドイツ人を中心にした「共産主義者通信委員会」を設立して、いよいよ実践運動に乗りだしているのであります。しかも、共産主義を国際的に宣伝し、かつ組織しようと計画したのであります。その手はじめとして、マルクスとエンゲルスとは、まず、ロンドンの亡命ドイツ人労働者を中核として、しかも、そのときまでには、国際的な組織にまで成長してきていた「正義者同盟」に加入して、そして、この「同盟」が従来からの陰謀的結社であったのを改めるように働きかけるわけであります。この働きかけは成功して、この「同盟」は、翌四七年の大会で「共産主義者同盟」と改称することになっております。このような共産主義の実践運動に乗りだす

当時は、ただいま申しましたところの「ドイツ・イデオロギー」を共同執筆していたわけですが、後年になって(『経済学批判の序説において)、マルクス自身は、この執筆の過程で、いわゆる「哲学的良心」を棄てることにした、というように回顧して述べているわけがあります。

しかし、この「哲学的良心」を棄てるというのは、それまで自分が、その影響下にあったところのヘーゲル左派の、フォイエルバッハを含めての革新的な哲学における「批判的な良心」と決別することを、いみずるだけのことであって、マルクス自身が、その独自の哲学を続けてゆくことを否定することには決してならない、というように、ぼくたちにとっては考えねばならないのであります。いいかえますと、もう哲学することを止めてしまって、これからは経済学の研究だけに専念しようと決意した、というように解釈するのは間違っているのであって、さきにも申しましたように、経済学を研究するための方法論としての哲学は、依然として続けてやっいていくわけがあります。いいかえれば、ヘーゲル左派の諸思想を批判するという哲学の仕事と、経済学を研究するという仕事を、別々に行っていくのを止めて、さきに申しましたよ

うに、哲学を経済学のうちに内在化せしめていこう、というように、マルクスは、自分の頭を切り替えていっただけのことではなかりません。経済学のなかに、その方法論として内在化されてゆくという、この方法論とは、いうまでもなく、フォイエルバッハのヘーゲル哲学批判では、棄てられてしまっていた弁証法を、マルクスとしては、ヘーゲルに遡って勉強しなおして、これを経済社会の領域に適用していつて、ヘーゲルの弁証法の思弁的であり観念論的である面を廃棄して、そして唯物論の立場における弁証法を、現実の経済社会の発展の論理として具体化してゆく、という、そういう哲学をやることを、マルクスは、この時期において決意した、というように、ぼくたちは理解すべきなのであります。

事実として、そのような努力の成果が、経済社会の発展を弁証法的に把握するという努力の成果が、史的唯物論ないしは唯物史観という理論となったわけなのであります。それだけではなく、後にマルクスが『資本論』という著作を出すまでの経済学の研究への努力の成果を、一步一步と進展せしめてゆく時期には、ヘーゲル哲学から、その方法論としての弁証法を唯物論的に具体化せしめるだけではなくて、ヘーゲル

資本論における方法と世界観（中、その四）（続）

哲学の体系性をも、唯物論の立場から批判的に継承しているわけがあります。そして、マルクスの『資本論』の第二、第三巻にあたる遺稿を、マルクスの死後において、エンゲルスが、その第一巻の体系性を完結せしめるように整理する、ということも、やってのけているという事実は、エンゲルスもマルクスと同じように、ヘーゲルの弁証法を経済学研究のための方論として、批判的に継承することから、さらに、ヘーゲル哲学の体系性の唯物論化したものが、どんなものであるべきかを、知っていたはずだ、というように、ぼくたちとしては、考えるべきだと存じます。そして、このような哲学と経済学との、より具体的な結び付けが、ヘーゲル哲学と古典経済学との同時的止揚の具体化ということが、また同時に、社会主義を空想的なものから科学的なものへ発展せしめていく、ということになっている、ということについては、さきほど申しあげてきたとおりであります。そして、そのような二人の継続的努力の、その初期の成果が、ブルードンの経済学を批判したところの四七年の『哲学の貧困』から、四九年の『賃労働と資本』へと結実していつてるわけがあります。

この『賃労働と資本』なるマルクスの著述は、その出版の

またに、すなわち、四七年の十二月に、ブリュッセルのドイツ労働者協会で、同一の題名で講演したものが、その原稿となっているはずで、そして、すでに、日刊紙『新ライン新聞』に、四九年の四月五日から十一日までの間に、掲載されていたのであります。この『新ライン新聞』というのは、プロレタリア革命の時期が到来しつつある、との予想のもとに、マルクスとエンゲルスとが同志とともに、祖国に帰って、かつての『ライン新聞』の発行されていた同じケルンの町で、四七年の六月に創刊したものであります。そして、その編集長は、マルクス自身であったわけであります。この『新ライン新聞』は「民主主義の機関誌」という副題が付けられているのですが、この副題の意味するところのものは、ドイツの当面しているブルジョア民主主義革命を推進せしめていって、窮極的には、プロレタリア革命をも同時に実現せしめよう、という展望をもったかぎりでの「民主主義」なのであったのであります。そのかぎりでは、四八年の九月から十月にかけての戒厳令下にあつて、その発行の禁止の命令を受けながらも、翌四九年の五月一日の最終号をもって自ら廃刊するまで、なお継続的に発行したということになっております。

マルクスとエンゲルスとが四七年にドイツに帰国するさいに、その予想のとおり、ヨーロッパ大陸の時局は非常に切迫していたのであります。そして、事実として、四八年の二月には、パリで、革命が勃発いたしました。しかも、この革命は、たちまち、ウィーンに飛び火して、メッテルニヒを失脚させる、ということになります。それだけでなく、プロイセン、バイエルン、ザクセン、バーデンなどのドイツ国民の諸領域に波及して、三月革命のなかに捲きこんでしまうことになりました。さらに、これら二月から三月にかけての革命の進展は、その他のヨーロッパの国にも深刻な影響を与えてゆくということによって、ヨーロッパ各国における絶対主義的な権力体制を、また、この体制を支持する色々なアンシャン・レジームとしての支配層を、その根底から揺がす、という事態にまで拡大していったのであります。こうした事態の発生を、マルクスとエンゲルスとは、その鋭い歴史的感覚によって直観的に予想することが可能であった、というわけでありました。これらの二人は、さきに申しましたところですが、四六年に、ロンドンの秘密結社の狭益な組織であった「正義者同盟」を「共産主義者同盟」と改名させて、公然

とした国際的組織に、発展せしめるように指導しておったのであります。そして、この共產主義者同盟の第一回大会は、

ロンドンにおいて、翌四七年の六月に開かれています。マルクス自身は、その旅費の工面がつかなかったために出席できなかつた、とされておりますが、しかし、その第二回大会には、エンゲルスとともにロンドンに行つて、これに参加しております。しかも、重要なことは、この同盟が今後展開していくべき運動のために、その運動の原理を説明すべき文書の起草を、この大会の決議として、兩人に依頼した、ということでありませう。そこで、これらの二人が、翌四八年の一月に、協力して執筆したものが、いうまでもなく『共産党宣言』となるわけであります。そして、翌月になつて、パリから（『あるいはロンドンで？』公然と発行されたのは、あたかも、パリにおいて革命の勃発したのと、ちょうど同じ月の二月であつた、というわけであります。この二月革命から三月革命への拡大ということの原因としては、前年の四七年において、経済恐慌が全ヨーロッパ的なスケールで発生していた、ということ併せて考えておかねばならないのですが、このことについて一言だけ、皆さんに申しあげておきたい

資本論における方法と世界観（中、その四）（梯）

なんです。

さきに申しました『新ライン新聞』の発刊は、このように経済的にも政治的にも危機状態にあつた最中のことであつたわけであります。マルクスとエンゲルスは、同志たちと一諸に、ロンドン（『あるいはパリ？』）から、三月革命の未だ終息していない祖国に、すなわち、四月には、すでに帰つており、翌五月に、この日刊紙を発行して、ほとんど一ヶ年の期間をつうじて、兩人は、ほとんど毎日におわたつて、プロレタリア革命を目指した急進ブルジョア民主主義革命のために、健筆をふるつて、その扇動活動を行なうというわけであります。

そして、マルクスは、四七年の十二月に、すでにブリュッセルのドイツ人労働者協会で講演しておいた、その同じ題名の「賃労働と資本」の原稿を、この日刊紙に連載（四九年四月五日—十一日）するにあたつて、このような主旨のことを述べております。——「われわれは、この新聞で、日日、新らしく作られていく史料にもとづいて、すべて、革命的反乱というものは、その目的が、階級闘争から、どんなにかけはなれているように見えても、革命的労働者階級が勝利するまでは、失敗せざるをえないこと、そして、どの社会改革も、プロレ

八九（二二三）

タリヤ革命と封建的反革命が、世界戦争という形で、武力をもって勝敗を決するまでは、ニュートピアにとどまること、などのことを実証しようと努めてきたが、いまや、今日の階級闘争の物質的基礎をなす経済関係そのものを、くわしく検討すべきときである。——このような主旨の序言のもとに、その経済的關係を検討せねばならないとする課題を、三つに分けて、提起しているのであります。

その第一は、資本制社会における「労働者の奴隷状態と資本家の支配について」ということであり、その第二は、現在の体制のもとにおける「中間的市民階級と農民身分との不可避的な没落について」ということであり、さらに第三の課題としては、「世界市場の専制的支配者としてのイギリスによるところの、ヨーロッパ諸国のブルジョア階級の商業的隷属と搾取とについて」ということであります。この最後の第三の課題を、マルクスが提起していたということは、当時のヨーロッパ諸国に波及した革命について、マルクス自身が、経済的見地からの一つの見とおしを付けていたということを、いみすると思ふのであります。いいかえますと、この四八年の革命の主導力は、たしかにフランスのプロレタリアートで

あったにしても、このフランスのプロレタリアートの真実の敵は、フランスのブルジョアジーではないのであって、いまや世界市場の支配者になっているイギリスのブルジョアジーでなければならぬのだ、という見とおしを、マルクスとしては、もっていたというように、ぼくたちは当然ながら考えては、もっていたという見とおしを、マルクスが、やつてらるるわけでありませう。このような経済的見地からの四八年の革命の推移にたいする見とおしを、マルクスが、やつていたということの、もう一つ深い理由として、ぼくたちが注目しておかなければならないことは、四七年に起っていた経済恐慌についての経済学的な認識が、マルクスの頭のなかで、すでに出来あがっていた、ということでありませう。イギリスにおいて産業革命が殆ど終りに近づいた頃の一八二五年に、イギリスに勃発した経済恐慌は、それ以来、周期的に、イギリスの資本主義経済を揺がしてきていたのであります。この一般的過剰生産恐慌については、マルクスも、さきの『賃労働と資本』の最後のところで取りあげて論述しているわけでありませう。ここに述べられた恐慌論を、さらに体系化してゆくことは、マルクスが、自分の経済学を『資本論』にまで体系化してゆくプロセスで、つねに念頭においたところの、も

う一つの理論的課題であったわけですが、すくなくとも四八年の当時においては、この理論的関心のうちに、それが当然ながら伴うべきところの実践的な動機が、秘んでいたはずだと推定することは決して誤ったことではないのであります。

資本主義のもとにおける経済社会に起る「地震」としての恐慌なるものは、それにといて資本家階級が常に行なう政策によつては、たとえば、労働者の賃金を高めて、その社会生活の不平等を緩和したり、あるいは、貨幣信用制度を改めて、流通の円滑化を計ったり、その他の体制内での色々の政策を実施することによつては、けつして根絶せしめることはできないのであつて、ただ、資本主義体制そのものを廃棄することによつてのみ、はじめて経済恐慌なるものも、同時に根絶されることが可能となる。こういうことを理論的に説明することが、マルクス経済学における恐慌論の本質的内容となるわけですが、しかし、現実の歴史過程において、経済恐慌のもつ意味は、それだけのものではないのであります。現実のこととして、資本主義経済の発展過程のなかでも、恐慌が起つた時期には、その時期の社会的経済的土台を揺さぶることによつて、その上部構造としての政治を混乱させると同

時に、一般的な社会不安をもたらす、ということになつてゐるのであります。そういう意味では、恐慌の勃発ということとは、それに伴う政治的な危機状態を逆用することによつて体制の変革を目ざす革命運動にとつては、非常に有利なチャンスになるわけでありませう。

そして、こうした実践的な意味をもつものとして、事実として、四七年において、まずイギリスにおいて勃発し、そして、つづいてドイツ、フランスに襲つていったところの経済恐慌の結果として、あるいは、それに乘じて、四八年の全ヨーロッパ的な規模の革命が、発生させられたわけでありませう。当時のマルクスとしては、こうした経済的および政治的に推移してゆくはずの局面を、さきどりして、ケルンでの『新ライン新聞』での煽動的な健筆を、エンゲルスとともに、振つたわけであつて、そして、この新聞紙上に「賃労働と資本」を發表すると同時に、いや、それ以前の二月に『共産党宣言』を發行しておつた、というわけでありませう。しかし、現実の歴史的な推移は、さきほど申してまいりましたことですが、マルクスおよびエンゲルスの革命運動のための機関紙として『新ライン新聞』に「賃労働と資本」を發表するにあ

たつての主旨としての、その序言的なところで、すでに、また別に予見していたように、——すなわち、そこで「革命的労働者階級が(全体として)勝利するまでは、どんな(部分的な)階級闘争も、失敗せざるを得ない」と述べているように、——四八年の革命は、まずロンドンで四月に、パリにおける六月の動乱、つづく十月のウイーンとベルリンの反乱において、つぎつぎに敗北してゆくわけであります。このパリの六月動乱のことについては、後になって(一八五〇年に)マルクスは「フランスにおける階級闘争」において、ウイーンの十月反乱については、エンゲルスが「ドイツにおける革命と反革命」(一八五一二年)において、ともに詳細に論述することになっております。このことについては、ここで省略させていただきます。ただ、四八年の当時において、ドイツのプロレタリア階級が、どういう態度をとったのか、ということについて、それだけにかぎって、ちょっと触れておきますと、だいたいにおいて、他の諸国のプロレタリア階級のとった態度と、ほとんど変らないはずですが、後進国としてのドイツでは、なお半封建的な絶対主義の体制の支配下にあったかぎりでは、その中世的な弾圧政策に依存して、局面を

何とか打開しようとする反動的な意欲が、より強かった、という特殊性をもっていたのであります。すなわち、どの国においても、プロレタリア階級は、当時のプロレタリアートの抬頭に直面して、いちじるしい恐怖をいだいたわけでありませんが、とくに後進国のドイツのばあいは、この機会に、その後進性を自覚して、そして、前向きに民主主義を徹底させる政策をとろうとする積極性を發揮することは、当然のことながら、やろうとしないで、逆に、封建的な諸勢力と妥協して、一緒になって、プロレタリアートの勢力を押しやうという方向に動いていったわけであります。そして、この動向のうえにたつて、絶対主義的な権力機構は、抬頭してきた新たなプロレタリア階級に向つて、政治的な弾圧を加えることに徹底した方策を打ちだしてゆくのですが、こうした支配層の策略にたいして、ドイツのプロレタリア階級は、いまだ階級的な自覚にもとづいた全国的組織も持つておらないので、この策略に対抗して、これを撥ね返してゆくだけの実力を、まだ備えておらなかったというのが、実状であつたわけであります。そうしたわけで、九月から十月にかけての戒厳令の施行のなかで、ケルンの『新ライン新聞』も、当然のことながら、

その発行を禁止される、ということになってゆきます。

すなわち、プロイセンの政府当局は、翌四九年の五月になつて、その軍隊の力によつて、ようやく、ドイツの革命的な動きを全国的に鎮圧してしまふことになつたのですが、それまで、禁止命令にかかわらず発行を続けていた『新ライン新聞』も、やむなく自発的に廃刊をよぎなくされ、そして、その編集長としてのマルクスは、翌六月にパリに亡命する、というごとになつておるのであります。ところで、この四九年の中頃になると、ヨーロッパ各国の経済情勢は、ようやく恐慌期を脱けだして除々に好転していつておるのであつて、したがつて、ヨーロッパ全体の資本主義体制そのものも、依然として存続しているというだけでなく、世界の全生産の飛躍的な増大に刺激される、ということもあつて、さらに発展していつて、そして、五〇年代の高度成長期を迎える、というようになつていつたのであります。このようにして、ヨーロッパの各国を脅かした革命は、四九年の中頃には完全に終息してしまつた、ということになりますが、そのためか、どうかについては、ほくは、よく知りませんが、とにかくマルクスは、八月に、パリを去つて、さらにロンドンに亡命してお

ります。エンゲルスも、また、遅れて、その年の十二月には、ロンドンに亡命してくることになっております。

この二人は、五〇年になつて、しばらくの間は、雑誌の発行をつうじて、ロンドンに同じく亡命してきていたドイツ人のあいだで、政治活動が続けるのですが、これらの同志であるはずの亡命者たちのなかで、政治的な確執が生じ、さらに、救援寄金をめぐる紛争が起つて、二人は、それらの調停のために手を焼いて、ついに、それらのグループから離れる、というだけでなく、思い切つて、いっさいの政治的な実践運動からも、離れていくことになりました。その九月には、ロンドンの共産主義者同盟は、分裂しているのですが、マルクスとしては、いっさいの実践運動から手を引いたとは言ふものの、そのさいには、四四年に着手し、四七―八年の「賃労働と資本」にまで進展せしめていたところの、経済学の研究に、ふたたび着手しようと思つたのであつたのであります。同志たちの紛争や確執のなかに巻きこまれたことによる精神的な労苦のほか、マルクスのプライベートの生活は、いよいよ物質的にも困難な貧窮状態に直面していたのですが、しかし、その四月には、四八―九年の激動期を振りかえつて

分析していったところの、その総括としての「フランスにおける階級闘争」を書きあげているのであります。そこでは、マルクスの当時の決意が、どのようなものであったかを知ることのできる言葉が述べられております。——「新しい革命は、新しい恐慌の後にのみ可能である。だが、その到来は、後者の到来と同じように、確実である」——すなわち、マルクスとしては、革命のための客観的な、および主体的な諸条件が成熟する将来を期待しながら、自分自身の経済学説を、いっそう完全なものに打ちたててゆこう、というように決意した、というわけであります。

この時期のマルクスの心境については、マルクス自身が後になって（『『経済学批判』の「緒言」において）回顧的に述べていることで明瞭なものとされております。すなわち、このように述べているわけであります。——「一八四八年および四九年の『新ライン新聞』の発行と、その後におこった諸事件とは、わたしの経済学の研究を中断させたが、それは、一八五〇年にいたって、ようやくロンドンで再開することが出来た。ブリティッシュ・ミュージアムに累積されている経済学の歴史に関する巨大な資料、ブルジョア社会の観察にたいし

てロンドンが与える有利な立場、さいごに、カリフォルニアおよびオーストラリアの金の発見とともに、はじまったように見えたブルジョア社会の新たな発展段階。これらは、わたしをして、まったく始めから、やりなおして、新しい材料を批判的に研究しつくそう、と決心させた。——このような回顧が、マルクス自身によって述べられていることは、当時の、すなわち、ロンドンへ亡命した四九年の八月以後の、マルクスの決意が、どんなに固いものであったか、ということとを、ぼくたちに確認を迫っているものと考えねばならないでしょう。事実としても、翌九月には、亡命ドイツ人労働者のなかで孤立をよぎなくされながらも、ブリティッシュ・ミュージアム、すなわち、大英博物館のなかにある、その図書館に日参して、終日、経済学の研究に没頭する、という生活が始まるのであります。そして、翌五一年の一年間には、すでに、部厚いノート約十四冊が、それらの抜萃で、ぎっしりと埋めつくされてしまった、という精進ぶりであったのであります。

しかし、この五一年からのマルクスの私生活は、子供が多く、しかも定収入もない以上は、その貧窮に堪えねばならな

いことは、さいしょから覚悟のうえのことであつたにしても、五〇年の一月に次男の死亡、五一年の三月に三女の出産といつたことで、その家計は綻破状態にあつた、というわけで、マルクスを絶望の淵に追ひこんでいったのであります。この私生活の危機において、これに援助の手を差しよべたのが、いうまでもなくエンゲルスであつたわけなんです。エンゲルスは、前年の十一月にロンドンを去つて、またマンチェスターに移住いたします。そして、親父さんの経営していた紡績工場に勤めていたので、このマルクスの私生活の危機を、なんとか切りぬけさせようと努力して、五二年の五月から、自分の収入の一部を割いて送金をしてやっているのであります。エンゲルスの援助は、これだけではありません。この金銭的援助のまえに、五一年の八月になつて、マルクスは、幸いにも『ニューヨーク・デイリー・トリビュン』紙から寄稿を求められていたのであります。そして、この最初の依頼のときから、ずっと、六二年の二月までの十年ほどの期間をうけて、毎週、定期的に原稿を送つて、その稿料（一論説、一ポンド）でもつて、なんとか食いつなぐことも出来ることになつたのですが、この原稿の執筆にも、エンゲルスは、い

資本論における方法と世界観（中、その四）（梯）

つも協力をしてやっていたのであり、ときとしては、自分で執筆して、これをマルクスの名前で発表さす、ということもあつたと伝えられております。いわば代作までしてもらつたうえに、送金を受けるという、物心両面での援助を、エンゲルスから受けて、マルクスとしては、一途に、経済学の研究に専念することができた、というわけであります。にもかかわらず、マルクスの家庭は、五〇年代をつうじて、いろいろと不幸に見舞われていくのですが、これらの事情については、五〇年代のマルクス夫妻をめぐる書簡集や、エンゲルスとマルクスとのあいだの住復書簡によって、詳細に、ほくたちは知ることができるのであります。

ここに見られるエンゲルスからの暖い友情に支えられ、そして、また、妻のイェニーが、家事のかたわら、夫の秘書役をつとめる、という内助の功にも助けられて、マルクスは、困窮の生活のなかで、ブリティッシュ・ミュージアムへの日参という研究生活が続けられてゆくわけですが、一八五七年に、たつて十年ぶりに、ヨーロッパに襲ってきた恐慌に直面して、時機到来とばかりに、それまでに書きためてきた雄大なノートを基礎として、いよいよ、彼自身の経済学の理論を、体系

的に整理しようと決心する。そして、執筆されていた手稿は、現在では『経済学批判要綱』（一八五七—八一年）と題して刊行されていて、ぼくたちは、そこに、五九年の『経済学批判』から六七七年の『資本論』第一巻の初版にいたるまでの、その素材を見ることができ、いや、それだけでなくて、八三年のマルクスの死後に、エンゲルスが纏めあげた『資本論』の二巻、三巻にいたるまでの、マルクス経済学の体系化のためのプランも、そこに見ることができ、というようになっていくわけでありませう。ところで、他方、エンゲルスとしては、四八—九九年の革命の総括を、マルクスのそれよりも二年たらず遅れて、同じような「ドイツにおける革命と反革命」を執筆したほかは、経済学の研究は、マルクスに委せてしまつて、その成果を見まもる、という恰好になっております。すなわち、五九年に『フォルク』誌に、マルクスの『経済学批判』の書評を、六七年には、各種の雑誌に『資本論』初版の紹介を、やっていると具合であります。そして、一八七八年になって、自分自身の著作として『反デューリング論』を、八二年には『空想的社会主義から科学的社会主義へ』を、出版しているほかは、マルクスの八四年三月の死

後において、その『資本論』の第二、第三巻としての遺稿を、整理、編集してマルクスの素志どおりに体系化したものを、八五年と九四年とに、順次、発行する、ということになっております。ついでに、エンゲルスの死去は、九五年の八月五日で、享年七四となっております。マルクスは六四才なので、すが、ともに病死なのであります。

このような生涯をつうじた協力関係ということは、まことに世にも希有な美しい友情であつたというほかないし、ぼくたちにとつても、また、まことに羨しいかぎりの交遊関係と見ないわけにはまいりません。こうした学問上の相互理解のもとにおける二人のあいだの生涯的な友情のなかにおいてこそ、マルクス主義は、前世紀のうちに完成したとも考えられるわけですが、いいかえれば、エンゲルスの物心両面にわたる援助と協力なくしては、ロンドン時代におけるマルクスの経済学の研究とその成果を『資本論』に体系化さすということとは、とうてい考えらなかつたわけですが、このロンドン時代の三四年間におけるマルクス自身の学問的苦闘のことについては、ここでは、お話しすることを省略しておきたいと存じます。

ここで、いま、とりあえず、お話しをしておきたいと思っ
ていることは、さきほど、お話しをやりかけておいたところ
の問題に帰って、それを要約的に結論づけておきたい、とい
うことであります。それは、マルクス主義の成立と、その発
展との、それぞれの段階の違いということであったわけであ
ります。そして、この段階の違いということについては、ぼ
く自身も、いままでには十分に認識してこなかったところな
んです。ここで、この講義を皆さんの前で、借りものの知識
のままに受け売りする破目になって、ぼく自身も、はじめて
気づかされたしだいなのですが、このマルクス主義の成立と、
その発展とを、区別して考える必要があるというように、ぼ
く自身に明確に気付かせてくれたものは、ただいま申しまし
たところの、一八八二年にエンゲルスの出した『空想的社会
主義から科学的社会主義へ』という著述のなかの一つの言葉
であったわけでした。このことについては、ブリュッセル時
代以後の二人の協力関係を、ながながと申しあげてくる、
その最初のところで、申しあげておいたことであつたわけ
です。そこで、その最初の問題提起に帰ることによって、ひと
まず、この講義の一区切としておきたいと存じます。ところ

資本論における方法と世界観（中、その四）（梯）

で、いま申しましたマルクス主義の成立と、その発展との違
いを、段階的に区別しようと、ぼくが考えることになった、
その機縁になったエンゲルスの言葉というのは、これも、さ
きに申してまいったものですが、それは「社会主義が空想的
なものから科学的なものに発展するうえでマルクスの二大
貢献は、史的唯物論と剰余価値論である」という言葉であつ
たわけでありませう。

さて、この言葉に挙げられている「史的唯物論」という歴
史観は、パリから四五年十二月に追放されたマルクスが、翌
四六年の正月から早速、エンゲルスと計画し、共同して執筆
したところの、そして出版しえなかつたところの『ドイツ・
イデオロギー』において、はじめて打ちだされているのであ
ります。その次の「剰余価値論」の方は、ブルードンの経済
学の非弁証法的なものを批判した四七年の『哲学の貧困』に統
いて、同年の末にブリュッセルのドイツ人労働者にたいして
やつた講演、それにもとづいて『新ライン新聞』に発表した
ところの「賃労働と資本」のなかで、リカルドの経済学の批
判的継承という形で、ようやく展開する段階に漕ぎつけてい
る、というわけであります。この「剰余価値論」は、ロンド

ン時代において、その科学的な規定を、より完全なものにしてゆくところの理論なのでありますが、その『資本論』における体系化された叙述のなかで完成された姿で見られる「剰余価値論」の、その出発点は、すでに『賃労働と資本』のなかで、萌芽的なものであるにしても、積極的に提起され、そのかぎりで、マルクス固有の経済学なるもの基礎づけを、成就していた、ということが言えるわけでありませう。

いいかえますと、それは「史的唯物論」が広い意味の経済学と呼ばれるものの最初の基礎づけであったのと同様に、この『賃労働と資本』における「剰余価値論」は、狭い意味の経済学、すなわち、資本主義的な経済社会の全体像を、科学的に分析しえた最初のものであった、とせねばならないでしょう。そのかぎりで、これら二つの経済学、すなわち、広義および狭義の二つの経済学は、後に、いや最初から統一されるはずのものが、別々に順次に創造された、というように考えるべきですが、この統一の原理となるものは、新たに創出されたところのマルクス主義的な新世界観でなければならぬはずであって、この世界観の対象化において、人類史全体についての史的唯物論という世界像と、資本制社会にかぎっ

たかぎりの世界像との、それぞれの科学的な分析において、二つの経済学が区別された形で成立している、というように、ぼくたちは理解せねばならないのであります。

このような意味をもっているところの二つの経済学の成立によって、エンゲルスの言葉によれば、社会主義は「空想的なものから科学的なものに発展する」ことができた、というように、ぼくたちとしては、理解しなければならぬ、といううことになってまいります。そうしますと、ぼくが前々から主張してきていたところの、マルクス主義の成立の時期と、その時期におけるマルクスおよびエンゲルスの労作について、どう考えなおすべきか、という問題が出て来そうでもありません。さきにも申しましたところですが、ぼくとしては、従来、マルクスの『経・哲手稿』をもって、マルクスはマルクス主義者になったのだ、と主張してきていたのですが、本日の講義をやるにあたって、エンゲルスの「国民経済学批判」においても、マルクス主義は、すでに成立していた、ということも、これを附け加えることにいたしました。それにしても、これらのマルクスおよびエンゲルスの二つの労作において、マルクス主義が成立した、と主張するばあいの規準は、レー

ニンの規定、すなわち、マルクス主義が成立するために不可欠な思想的三源泉を同時にアウフ・ヘーベンしている、という規定に、かかっている、ということであることは、かわりはないわけです。そうしたレーニンの規定を規準としたかぎりで、いま挙げたところのエンゲルスおよびマルクスの二労働をもって、マルクス主義が成立した、ということができるといたしまして、この成立したマルクス主義の発展ということについては、エンゲルスの『空想から科学へ』に述べられている言葉を、さらに別の規定として受けとめて、この規定を規準にして判断してゆけばよい、と考えれば、そこに、ぼく自身の従来主張を撤回する必要はないのではないかと、ぼくは思うのです。このようにマルクス主義の成立と、その発展とを、思想成長の、あるいは理論的具体化の、段階の差異として理解することは、けっして不自然な考え方でない、というように皆さんにも理解していただけると、ぼくは思うのですが、しかし、そこに問題がないわけではありません。

と申しますのは、エンゲルスの『空想から科学へ』における言葉を、そのままに受けとりますと、マルクスの社会主義が、実質的に科学的なものに転化するためには、四六年の

資本論における方法と世界観（中、その四）（梯）

「ドイツ・イデオロギー」と四八年の「賃労働と資本」との二労働を、またねばならなかった、ということになります。そうしますと、四四年のエンゲルスおよびマルクスのそれぞれの労働においては、いまだ科学的社会主義の立場に、これらの兩人ともが、立っていないのでないか、さらに極言して言いかえますと、四四年の頃の兩人の社会主義についての思想なり理論なりには、なお空想的なものが残っていたというように逆に推定できるのではないか、という疑問が、出されてきても己むをえないことであると、せねばならないからであります。こうした疑問が尤もなことだとすれば、四四年の兩人の二つの労働において、ヘーゲル哲学の止揚の点は、ともかくとして、すくなくとも古典経済学の理論内容の批判的継承ということも、なお不十分なものでなかったのか、という疑問も同時に、皆さんの頭に浮びあがってくることも、また尤もなこととしなければなりません。

こうした当然ながら提出されて然るべき疑問を、予想したうえで、実は、ぼくとしては、四四年当時のマルクスの労働過程を、エンゲルスのそれをも関連せしめて、まえもって（■本稿の前節のところ）、お話しをしてきておいたわけであ

ります。四四年のバリ在任時代に、当時に広く読まれておった社会主義の諸思想を、またブルードンの理論を、マルクスが、どのように批判しようとしていたか、すなわち、それらの社会主義の空想性を克服するために、古典派の代表的な経済学の諸説を精力的に読みはじめたか、という事実、そして、これらの経済学の批判的撰取にあたって、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」という論文が、おおしく刺激することになり、そして、その年の八月に記念すべき会見が行なわれることになった、という事実、まえに（日本稿の前節において）申し述べておいた事実を、ここで想いおこしていただければ、エンゲルスの言葉だけからならば、当然ながら起りそうな疑問も、皆さんの頭から消え去ってゆくはずだと存じます。要するに、ブリュッセル時代において、マルクスおよびエンゲルスの社会主義が科学的なものとして理論的に基礎づけらるにいたる、その萌芽的思想は、すでに、パリ時代において、当時の空想的な社会主義の諸思想とは、区別されたものとして構想されていたのであります。そのかぎりにおいて、四四年において、マルクス主義が成立した、というように繰り返えし、ぼくは申してまいりました。この四四年に

マルクスとエンゲルスとの兩人の頭脳のなかに構想されていたところの、科学的な社会主義の萌芽形態が、ブリュッセル時代において、どのように成長して、そして理論的に基礎づけられていったか、ということについて、やはり系譜にそって具体的に申しあげたのが、ただいまのお話となっております。